

祇園祭禮信録

四

金閣寺の段

〔解説〕寶曆七年十二月五日から豊竹座上場。作者は中邑阿契・豊竹應律・黒藏主・三津飲子・淺田一鳥の五人。「信長記」の世界であるために、始めは「祇園祭禮信長記」といつたが、其筋の命で信仰記に改めたのである。

松永大膳は主君足利義輝を弑して天下横領の大望を抱き、金閣寺の高樓に居を構へ、その樓上なる究竟頂に將軍の母慶壽院を押籠めて人質となし、豪奢を極めて居る。その慶壽院の望みとあつて大膳は、天井の補の一枚板に墨繪の雲龍を畫かせるために狩野將監の女雪姫と婿狩野直信とを召捕つたが、二人共容易に意に従はぬので、直信は入牢させ、雪姫に雲龍を畫くか、我に磨くか、さもなければ夫を殺すぞと言つて迫つた。雪姫は大膳の持つ太刀の奇瑞によつて父の敵は大膳と知り斬つてかゝつたが却つて縛せられる。姫は爪先で櫻の葩を集め描く鼠の爲に助けらる。智謀を以て大膳に取入つた小田春長の臣此下東吉が慶壽院を救ひ足利家の二つ引兩の旗を奪ひ還し、遂に大膳を志貴山の城に攻滅すといふ筋である。全篇の場割りをいへば、第一段は大序、中祇園の段、切室町將軍館の段、第二段は口浮世風呂の段、中金閣寺恭立の段、切芥子昂の段、第三段は口上煙屋、中輝若丸の段、切是齋内の段、四段目は口浮世風呂の段、中金閣寺恭立の段、切雪姫爪先鼠の段、第五段は志貴山の段となつて居る。こゝに收めたのは四段目の中である。

本曲の雪姫は歌舞伎に於ては「廿四孝」の八重垣姫「鎌倉三代記」の時姫と共に三姫と稱へられる難役である。淨瑠璃で雪姫を材題としたものは宇治加賀掾の「女繪師狩野雪姫」が最初らしい。その一段を宮古路豊後が轉用して「傳授の雲龍」と題して語つた。豊後節の最古曲として今も常磐津に傳へて居る。この雪姫に近松の「傾城反魂香」の上巻高島館の段の狩野四郎二郎の虎の段の趣向が取合せられて本曲の雪姫は描かれたものと思ふ。本曲初演の時は、金閣寺の三重のセリ上げセリ下げる用ひ、又若竹東二郎の遣つた此下東吉の人形の頭を、京都高臺寺の太閤の木像に摸して人形細工人龜屋利助が造つた事などが大いに人氣を呼んで、寶曆九年春迄三年越打續け、その後も操で屢々練返されたのみでなく、歌舞伎に入つても名高くなつた。現行の稽古本も原作と同文である。

雖そも／＼金閣と申すは。鹿苑院の相望む故。その

國義満公の山亭。三重の樓。山亭に龍は誰に畫せ

は八つのフシ致景を移し。夜泊の石岩。ふと問へば。

下の水。瀧の流れも春深く。柳櫻を植久秀舊恩の主君を亡し。猶野之助直信

ゑませて今ぞ都の錦なる。地松永大膳。か雪姫ならで

久秀當太に押しこめ置き。遊興に月も日も。立つや彌生の天罰に。汝達に言付け

シゆとり。ある間の榮華なり。地鬼當兩人を召捕り。

太相手に圍む碁の二番續けて勝のは。直信めに言付

さるに依つて汝達に言付け

此下東吉の頭。若竹東二郎思

附而是ヲホク。兩者を召捕り。細工人

のぬかす。雪

ま。調鬼當太に負けたよな。白は源くれば四の五

氏源の義輝を四つ目殺しにした松永。

なか／＼我には續くまいと。地白慢黒姫も同じ様に

白石片づけ。閣へ知らせの鳴子の綱。何とやら斟酌。

フシ引けばら／＼立出づる。地石原とかく慶壽院

新五乾丹藏川嶋忠治。大膳が前に手をが機嫌を取る

つけば。調オ、呼出すは餘の儀でない。も。心に一物

究竟頂に押箱めた慶壽院。この天井。あつての事。

桶の一枚板。その裏に雲龍を畫せよと

雪姫も手に入

祇園祭禮 信仰記



高臺寺太閤様の
木像ヲ遷セシトナリ

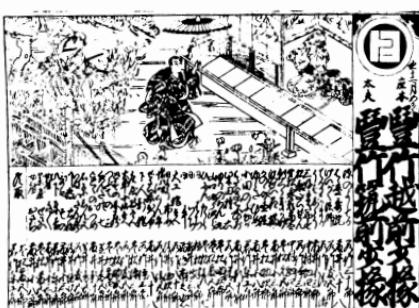
れて抱いて寝る我が分別。邪魔になる々詞を揃へ。尤もなる御計畧中々油断しあくれば。
 直信めは軍平に言付け詰牢へぶち込んは仕らす。
 地只今打つたは時計の七つ。勇める中に雪姫が。夫は牢舍の苦しみだ。
 三人の者ども。慶壽院が替固隨分と番代りに参らんと、
 フシ打連れ閣へ上りを引替へ妻は綾錦あやにき。
 長地蒲團ながじふだん幾重か其意るなど。
 地いへば鬼當田皆聞いたか。ける。
 地大膳盤を押しやつて。調ヤア
 調雪姫を抱いて寝るは聞えたが。あの鬼當太。
 調残念なは淺倉義景。信長が計
 義輝や慶覺を産んだ慶壽院。どこに見
 込みがあつてあの様にして置かるゝ
 ゾ。この鬼當太が兄貴なら引つくゝ
 め存分にと。
 地いへば大膳ハ、、、。
 地天晴よき侍もがなと望む折から。
 地調何を若輩者の知る事でない。短う
 此下東吉といふもの。信長が手を離れ
 いへばかの王陵が母を虜同然。慶覺始
 浪入し。我に奉公を望むよし心得すと
 め諸國の武士蜂の如くに起つても。む
 は思へども。軍平がいふに任せ。
 さと我に敵對させぬ思案。信長にもせ
 長。謀事を以て。東吉を差越さば。こ
 よ此閣に押寄せなば。一番に慶壽院を
 樅の板にくゝり上げ。此劍を咽に差付
 け一思ひ。去年五月室町落城のその後。
 猫の子が一匹え手さしせねは。きやつ
 き軍平。隙の入るはかの東吉同道いた
 を人質に取つた故さ。三人ながらいよ
 すに極はまつたり。地其間に一杯食べう藝
 油斷仕るな。早く参れ。ハツト皆
 者どもを相手にと。フシ間の障子を押



年七月寶

上に泣きしをれたる有様は。王昭君が
 脊近く立寄つて。調詰牢とは品をかへ
 胡地の花 フシ色香。失ふ風情なり。
 地大
 舞ひ歌はせて奔走するも。慶壽院が指
 上に泣きしをれたる有様は。王昭君が
 脊近く立寄つて。調詰牢とは品をかへ
 胡地の花 フシ色香。失ふ風情なり。
 地大
 舞ひ歌はせて奔走するも。慶壽院が指

圖した天井に墨繪の龍。直信に代つていたか。慶壽院が望みの通り冒付くれ
 畏くか。但し抱かれて寝る所存か。どうば。家の秘書がないといふ。そんなら
 ちや。娘どうぢやと責められて。娘はや枕の伽ささうと言や。直信めに義理穿
 う。額を上げ。胸思ひも寄らぬ御難鑿胸が悪い。所詮邪魔になる直信め。
 題。繪の事は祖父様より。家に傳はる軍平が戻り次第岩下の井戸へ釣おろ
 ことなれば。何しに辭退は申さねども。し。殺して仕舞へば跡がさつぱり。そ
 も水草花鳥に事かはり墨繪の龍は。家これともに直信を殺しともなか。おうと
 の秘密。雪舟様より父將監まで傳はり。言うて雲龍を書きなりと。抱かれて寝
 しが。何者の仕業にや父を手にかけなりと其方が得心次第。活さうと殺さ
 其上に。家の秘書まで失へば。何を手うととつくりと思案して。よい返答聞
 本に盡くべき。その儀は赦して下さりくまでは蒲團の上の極樂責め。藝者ど
 ませ。同じ事をいふ様なれど。直信殿も張上げて歌へくと勇めても。娘娘
 と我が仲は。お前も知つてござんす通は鬼角の答へスエテ涙より外。なかり
 り。娘お主様のお情で夫婦となつた義ける。娘かる所へ十河軍平。伴ふ此下
 理あれば。たとへ此身を刻まれても不東吉が。衿元に抜き刀フシ指付けく
 義は女の嗜み事。私ばかりか夫まで牢入り来れば。娘こなたも障子をさしも
 舍とは惜なや。かゝる憂目を見せんよの大膳。詞ヤア軍平。その手籠は何事
 に。その信長を見限り大膳に仕へんと伏して。泣き居たる。詞鬼當太アレ聞
 を望み准參は歎せども。もし過もあら



行興月二

刀を赦して近う／＼と詞の下。地家來と一間を忍ぶ雪姫が。ステ心一つの物枕並べし例もある。それは子故。わしに持たせし添刀。渡せば取つてさす案じ。詞囚れたを幸ひに。御恩を受け子とは無けれども。大切なお主の爲。

がの東吉。兩手をつかへ譯んで。詞御慶壽院様奪ひ返さうか。夫の命も差當る夫の命さうぢや。地さうぢやと覽の如く四尺に足らぬ此下東吉。甲州助けなし。地ア、どうかなと差俯き。立上り。震ふ膝節松永が。フシ後にお山本勘助に比べては。拔群劣りし小男。千々に心を。フシカヽリ碎くは恭立て大づ／＼立寄つて。詞先程の御返事を申お馬の口か林の役か。恐れながら御譯膳は。先手の石打つや。現の山萬の。し。地申しと手をつけば。甚に打傾く代とも。思召し下されなば有難く候と細道此下が。詞一間飛びに入込んだも。顔もも上げず。覗くは誰ぢや。アイ私身を謙り歸まる。ム、古ヘ齊の晏子松永を討つて取る。フシ岡目八日軍平でござります。先程の御返事を。詞ム魂の人相の差別善惡によるべきか。さ交そとつい一言。言うたらいとい直イあいとは味い。昨今の東吉が見る前。は言へ人には一つの癖のあるものとは信様。牢舎を助けてくれませう。とは戀は曲者赦せ／＼。ハア是は／＼痛み慈鎮が歎。この松永も甚好むが一つ言へ憎いあの大膳。何と枕が交されう。入つたる御挨拶。主となり家來となれの癖。相手は是なる鬼當太軍平や幸ひ厭というたら夫の命。詞危ない事の。ど。基の勝負には遠慮は致さぬ。軍平目見えの東吉。試みに何と一番打たう。大膳が石が既の事。アいや／＼死ぬる殿。いかにも左様。女房にしてう(翅膀)かい。地是へ／＼と盤引寄せ招く頤おは此白石。どうやら過鱗の魚。白き方とはづんでござる大膳様。オ、サ＼＼。髭の塵。取敢ずお相手と盤に向ふも先には目が無うて。あるか無いかの。地辻晩には一日。かう(劫)押さへて。この手後手。軍平是で見物とフシ腰打ちか占を聞くもフシだ／＼胸撫でおろし。東吉が中手を入れて。面白い信長でもけて差窓ふ。フシ隔ての障子。そろ／＼詞ほんに昔の常盤の前夫の敵清盛に。直信でも。切つて仕舞へばだめも残ら

ぬかい。いか様左様と當太が助言。軍抱いて寢た其上で直信は赦してくれう。と負けるは追従薄い。負腹の投打ちな平切れく。切つてしまへと恭順の詞。と。地いふに、少しひは落付く思ひ。ら今一勝負遊ばされんや。サ、、、、、
地はつと駆出す十河軍平。姫は驚きア。地大膳盤を打眺め。詞大方この恭もおアコレ待つた。駒切るとは誰を。ハテこれが勝。勝負を付けて見ようかい。地吉が。手段もさぞと。シ知られたり。
知れた事。狩野の直信。ナウ待つて下さ然らば左様と東吉が。向ふ敵は小田信。地大膳も納得し面白い恭の聲。詞見かんせ。夫を殺すまい爲に大膳様のお心長。詞この大膳が後陣の備へ。つゞくけに寄らぬ丈夫の魂頬もしゝく。誠に。從ふ心で爰へ來ても。恭に打入つて恭勢は。あるとも／＼有馬山。いなの武士の肝要是軍の驅引。その驅引にはござる故差扣へて居たわいなう。地マ。笠原足つくな。突いたら大事か取つて智謀が第一。汝が才智を試みんには。ア／＼待つて下さんせ。詞何ぢや身がくりよ。取るとは吉左右天下取る。國地ハテ何をがなと思案の内。傍なる恭心に従はう。アイ／＼そりや眞實か。餘を取ろ／＼とろゝ汁。山の芋から鰻と筈をあつ取つて目當は岩下の井戸の急で呑込まねど軍平待て。恭にかゝは早い出世のやつこらさ。詞三五十八中。さんぶと投込みいかに東吉。詞今つては傍あたり。姫が來たやら何いふ南無三寶大膳様がお負けぢやと。地は打込んだ恭筈の器手を濡らさず取つやら。危ないは狩野之助。ハ、、、、なま拾ふ間も短氣の松木。盤を掴んで打て得さす工夫やあるか。地と猶豫う東吉。かの太平記に記した。天然波付くるを。すかさぬ東吉扇のあしらひもなくオクリ庭に。おり立ち金筈桶。漲羅那國の大王まつ此如く。恭に打入り。につこと笑ひ。詞總て恭は勝たんと打ぎる瀧の流れを直ぐに井の内へ暫時に過つて沙門を殺した引き事。それは因たんより。負けじと打つが恭經の挽汲取る早業は。井桁を越して水の上浮果。是は眼前。コリヤ雪姫。心にさへ東吉が癖として圍恭に限らず口論。或めて取つたる件の恭筈。在合ふ盤を打從へば直信は助けんと。つがひし詞反は戦場に向うても後れを取ること大嫌古にもなるまい。暮を待つて闇の盃。ひ。盤上は時の興。勝つべき恭をわざる恭筈は信長が。首を掲げこの如く。

首賛檢の其時に用意に用ふる碁盤のましゝ。端したりくと松永兄弟軍平裏。四つの足を四星に象り軍神の備も舌を巻き。かほど才智を備へし東吉。案内せよと。令する詞に兩人がオカリ伴へとし。小田を亡す血祭と盤を片手に御手に入るこそ吉左右めでたし。先づひへ奥に入りにけり。差上げしは。下郡の土橋に石公が脅を先づ一間に御入りあつて御酒宴もやと捧げし張良も。フシかくやとばかり勇勵むれば。いかにもく天晴頓智。い